

## 名古屋大学の情報戦略について

伊 藤 義 人

名古屋大学情報連携基盤センターが創設されて約3年になる。私は前身である大型計算機センター時代の20年以上にわたるプログラム相談員として、また、情報連携基盤センター創設においては創設委員として、文部科学省との交渉も担当し、現在は運営委員と協議会委員としてセンターに関係している。さらに、カード利用の時代からのセンターのヘビーユーザとして、現在のスーパーコンピュータまでずっと付き合ってもきた。これらの経験から名古屋大学の情報戦略（IT戦略）と今後の情報連携基盤センターのあり方について私見を述べたい。

まず、情報戦略というと大げさに考え過ぎるきらいがある。ここでいう情報戦略は、大学の戦略を支える情報のあり方をいうのであって、決して大学の戦略の前に情報戦略がある訳ではない。また、戦略という用語自体を軍事用語として好きになれないと言う人もいるが、これも大それたものではなく、ようするに持てる力や限られた資源（ヒト、モノ、カネ）をどのように長期的な視野を持って有効利用するかということと理解すればよい。塩野七生が「ローマ人の物語」で書いているように、古代ローマ人が、頭脳でギリシャ人に、技術でエトルリア人に、経済力でカルタゴ人に劣るといわれていたのに成功したのは、まさに戦略があったからである。名古屋大学の現在置かれている状況からも、名古屋大学に戦略が重要で必要不可欠なことは明らかである。

情報連携基盤センターの前身である大型計算機センターは、私の学生時代に創設されたが、その頃は、まさに計算機資源を提供するというので、大多数のユーザがFortranプログラムを自ら書き、大型計算機センター職員などが開発したライブラリを有効利用して数値計算を行っていた。プログラム相談も含めてセンター職員に多大な支援を直接受けていた時代である。スカラー計算機からベクトル計算機そして並列計算機になっても、それらの有効利用は研究推進に欠かせないことには変わりがない。しかし、その内容は単なる数値計算から情報処理やネットワーク利用に大きな比重がかかるようになってきている。数値計算を主としたスーパーコンピュータの利用者数は、残念ながら激減しているのが現状である。大型計算機は恐竜に例えられ、大型化・高性能化が進んだが、激変する利用環境に適合できず絶滅が危惧されている。しかし、大学の情報基盤やその戦略がますます重要であることは、教育研究における情報の役割や最近の社会の変化が情報革新によってもたらされていることから分かる。多くの教員を含む役職員が、時代に合致した情報支援を求めており、大学の情報武装が必要である。研究手法やコミュニケーション手法なども、今後、情報技術の進展によりますます激変することが予想される。戦略のないハード、ソフト及びコンテンツの情報基盤整備は、もはや限界に来ているといえる。

ユーザの数が激減しているスーパーコンピュータについてさえ、その重要性は減ってはならず、

その有効利用を図ることは、名古屋大学にとって重要である。電気代だけで済むからとパソコンやワークステーションだけで研究を進めている研究者が多くなっているが、そのハードやソフトのメンテナンスや更新をバラバラにやっている労力や経費を考えると大学全体としては決して経済的にも有利とは言えず、また、大規模シミュレーションにおけるスーパーコンピュータの重要性は、もっと認識されてよいであろう。スーパーコンピュータを持っている大学として、その有効利用による最先端研究を研究者の卵である大学院生の時代から発想してもらうため、ソフトの支援システムや課金制度を、法人としての自由度を最大限利用して発想する必要があると考える。時代がさらに必要としている最新情報支援についての戦略的対応の必要性は言うまでもない。

国立大学法人として、名古屋大学が教育、研究及び社会貢献において活性化し、自律性と個性化を進めるためには、名古屋大学独自の情報戦略が必要であり、皆が知恵を出す必要がある。法人化は、学内構成員の個々人が強くなることでもあると言われているが、この問題に関しても、情報連携基盤センター職員も含めて、大学構成員の個々人が創意工夫を持って、清新で自由闊達な議論を行うことが必要であり、自らが変わる苦しみをいとわぬ考え方が必要である。

私が10数年前に米国の教育研究のコンピュータ事情調査をしたときに感じたWebの可能性は、予想を遙かに超えて社会を変えつつある。この教訓からも、固定的な情報戦略ではなく、動態観測をしながら改革を推し進める情報戦略システムの構築が必要であると思う。

直近の話題となっているWeblog（ブログ）などに代表されるように、大学が生産する情報のアーカイブなど、時宜を逸しないように対応を迫られている事項がたくさんあり、時代に合致した名古屋大学の情報戦略を構築し、それをシステムとして運営するために柔軟な対応が、大学全体に求められている。とりわけ情報のハードとソフトウェア基盤を担当する情報連携基盤センター、情報教育やデジタル教材開発を担当する情報メディア教育センター、そして情報のコンテンツを担当する附属図書館などの情報関連部局の連携が重要であろう。とりあえずは、大学の情報戦略をシステム化する機構をつくり、中長期的には現在の組織の再編も視野にいれて、時代に取り残されないように情報戦略を継続的に担うべき組織作りが必要であろう。

（いとう よしと：名古屋大学附属図書館長  
名古屋大学大学院工学研究科教授）